

明治専門学校派遣滞独留学生 中川維則

——地理学的の巡検を試みた工學士——

中川 浩 一
中川 陸

明治四十(一九〇七)年十二月十九日、農商務省に奉職し、鉦山監督署技師を命じられ、東京鉦山監督署に勤務中の中川維則(一八八一—一九四五)は、「欧米各国ニ於ケル鉦業ニ関スル事項取調ヲ嘱託ス」との辞令を、交付された。出張を命じる辞令ではなく、「取調ヲ嘱託」との表現になったのは、以後、足かけ三年に及ぶドイツへの留学に要する経費が、農商務省からの支出ではなく、福岡県遠賀郡戸畑町(現・福岡県北九州市戸畑区)に校地を選んでの設立が、同年七月二十三日付で認可^①されていた私立明治専門学校からの據出と決まっていたからであろう。

ドイツ留学中の中川維則は、明治四十一年十二月二日付で、「満四ヶ年在官ニ付金百參拾參圓參拾參錢退官賜金下賜」の辞令を受けている。それゆえ、渡欧は農商務省官吏の身分でなしたけれど、在欧中に官吏の身分を失ったかと判断される。明治四十三(一九一〇)年二月八日帰朝、翌日付で私立明治専門学校教授を嘱託、年俸千六百円支給が決まっている^②。

明治専門学校設立の経緯

九州工業大学の前身を構成する明治専門学校は、明治三十四年六月から同三十八年十二月まで東京帝国大学総長を勤め^③、明治三十七年から貴族院議員でもあった^④山川健次郎(一八五四—一九三一)を総裁として設立され、修業年限を四か年と定める私立の専門学校であった。

明治専門学校は、石炭販売業に従事する過程で炭鉱操業にも関与し、赤池炭鉱の経営で財をなした安川敬一郎(一八四九—一九三四)が、近代的な鉦工業の運営に資する技術者を、地方のレベルでも養成する必要を痛感し、私財三三〇万円を投じ、七万八七七六坪の敷地を用意して開設をおぜんだてした教育機関である^⑤。

明治二年(一八六九年)に藩命による京都留学の経験をもち、明治四年には上京のうえ慶応義塾に学んだ安川敬一郎は、兄の死によって帰郷して、石炭業にかかわりをもたざるを得なくなった。この様に青年時代、学問に志をたてた経歴が、自らは果たし得なかった夢を、次代の青年に託そうとする企てをなさせたとみたられる。

赤池炭鉱を経営当時、安川敬一郎は、明治三十五(一九〇二)年に中級技術者の養成を目的とする赤池鉦山学校の設立を行っていた。日本最初の炭鉱技術員養成所とみたられるこの学校は、赤池炭鉱の首脳部・職員が教師を勤め、生徒は坑員の中から有望と目される中等学

校卒業生を選抜して運営された由である。授業料は徴収せず、生徒には坑員としての身分を保持させて、給与を支給し続けた⁶。

赤池鉱山学校は、赤池炭砒の火災事故に伴う事後措置とのかかわりから明治三十七年十二月に閉鎖のやむなきに到ったが、日露戦争が契機となる好況によって得た大きな利益を、社会に還元する手段として再度の学校設立を思いつたのが、明治専門学校創設の由来かと思われる。赤池炭砒の経営に並行する形で操業にかかわり、明治三十五年末以来、経営権を掌握してきた明治炭砒からあがる大きな利益が、三百三十万円の学校設立資金を確保させたわけである⁷。

鉱工業専修で四年制を採用

明治専門学校は、「高等ノ技術及ビ技芸」の教授を目的として、明治三十八（一九〇五）年に制定された「専門学校令」にもとづく高等教育機関として発足した。専門学校教授内容は、鉱工業に限るものではなく、一橋大学の前身を構成する高等商業学校もあるわけだが、重化学工業の存在を前提とする採鉱、冶金、機械の三学科で明治専門学校が発足したのは、資金拠出者の安川敬一郎が炭鉱経営者という事実と深くかかわる筈である。冶金は、国内各地に点在する銅山の操業と結びつく重要な技術であり、操業開始まもない製鉄所とも関連を持っている。機械は、炭鉱・鉱山の操業に不可欠の存在であった。鉱山の機械修理工場を基盤にして、日本の機械工業が育っていく事実に着目したい。

明治専門学校が設立を認可された当時、鉱工業関係の専門学校は、東京、大阪、京都に設置済の官立高等工業学校が、卒業生を送り出し

ているに過ぎなかった。専門学校令にもとづく新設が行われた名古屋、熊本、仙台の各高等工業学校は、卒業生をだすには到っていない⁸。官立の高等工業学校が、在学三年の制度を維持したのに対し、明治専門学校は四年制を採用し、予科一年、本科三年とし、基礎教育の重視を指向した。

予科を設置した高等専門学校としては、いま一校、早稲田大学理工科があげられる。予科一年半以上を設ける場合、私立専門学校を「大学」と称しうるとする規定にのっとり、早稲田大学理工科は、四年半の修業年限を定めたわけである。明治専門学校と早稲田大学理工科の卒業生は、工学士の称号を許されていた⁹。

こうして創設された明治専門学校の運営に、山川健次郎が総裁として関与したのは、東京帝国大学総長の職を辞して、身軽になっていた事情に加えて、安川敬一郎が学校経営の全てを委任し、「金はですが口はださぬ」と約した事情にもとづく由である。工業立国をとえ、そのための理学工学の振興を力説する一方、官立の高等教育機関が不足し、有爲の青年を充分に育て得ずにいる実情を、慨嘆していた事情にもとづく説明されている¹⁰。

中川維則の戸籍を調べる

鉱山監督官に在職のまま、明治専門学校からの給費によってドイツに留学した中川維則は、明治三十七（一九〇四）年七月、東京帝国大学工科採鉱及冶金学科卒業の工学士であった。『東京帝国大学卒業生氏名録』によれば、この年に採鉱及冶金学科を卒業した工学士は十七名で、名簿筆頭は日置雅章、中川維則は第三位に位置づけられて

いる。当時の卒業生名簿は、卒業成績の高得点者から順に記載した由である。

文部省に保管されていた中川維則の履歴書は、明治三十九(一九〇六)年九月 中川ト改姓と記述する。それゆえ、大学卒業時は神奈川県平民としての出縄維則であった。

北九州市戸畑区役所が保管する除籍謄本(戸主中川維則)によれば、明治三十九年二月二十六日付で、神奈川県中郡山背村萬田九百二十番地に本籍をおく出縄善太郎の二男が、神奈川県中郡大磯町大磯千五百番地に本籍をおく中川キセと養子縁組を行った結果、中川姓を名乗ったことよって、出縄維則が中川維則となったのである。

神奈川県中郡山背村は、今日では平塚市に属している。出縄維則の父親(善太郎)は安政元年(一八五四)の誕生であったが、出縄家へは明治四年(一八七二)に養子しており、旧姓は高橋であった。出縄重兵衛とミヨの夫婦に息子がなく、高橋善太郎を娘のツ子(ツネ)に配したところ、明治九(一八七六)年に到って出縄恭蔵が生まれたため、出縄(高橋)善太郎の地位が不安定なものになり、相続も義弟の恭蔵が明治二十六年(十六才)に行ってしまう。出縄維則の中川家への養子も、この様な父親の不安定な地位とかわわつていよう。

中川キセの養子となった中川維則は、明治四十一(一九〇八)年一月十日、分家して戸主となり、その後には父母(出縄善太郎・ツ子)を入籍させている。真に複雑な戸籍関係といふべきだろう。

中川維則は、大正二(一九一三)年三月八日に小花光と結婚したが、大正七年九月十五日に死別となった。そのため、大正九年六月十二日に中川末と再婚した。双方が中川姓であったのは全くの偶然で、中川末の実家は、長野県下伊那郡飯田町(現・飯田市)に本籍をおいていた。それまで、双方の中川家の間には、姻戚関係は存在しなかった。

岳父小花冬吉の経歴

東京帝国大学卒業直後の明治三十七(一九〇四)年八月五日、出縄維則は、農商務技手に採用され、あわせて鉱山監督官補となった。農商務省での所属は鉱山局で、ついで東京鉱山監督署技師に昇任した。けれども、技師としての勤務は実質一年半ほどにすぎない。明治三十九年十一月三十日付で、文官分限令第十一条第一項第四号により、退職を命じられている。

退職は、一年志願兵として鉄道聯隊への入隊が決っていたからである。翌年十一月三十日付で陸軍工兵軍曹となって、農商務省に復帰するが、明治専門学校による給費でのドイツ留学は、この時点で決定済であったと思われる。

出縄(中川)維則が鉱山監督業務に従事した期間は三年たらずの短い期間であったが、この時点で小花冬吉(一八五四―一九三四)を上司に迎えたことは、中川維則のその後の人生に少なからぬ影響を与えている。

小花冬吉は、お雇い外国人ヘンリー・ダイアーによって創始され、日本におけるエンジニア教育の原点に位置づく工部省直轄の工部大学校を第一回生として、明治十二(一八七九)年に卒業した。専攻は、冶金学であった。工部大学校は多くの人材を各方面に送り出しており、東京駅、日本銀行本店の設計者辰野金吾、琵琶湖疎水の設計者田辺朔郎は、ともに第一回生の仲間である¹⁾。

小花冬吉は、官費留学生としてドイツに留学し、ドイツ帝国に属するザクセン王国内に位置するフライベルク Freiberg で鉱山専門学校

Bergakademie に入學した。帰国は、明治十六年であった。直ちに工部省御用掛となり、鉱山課に出仕する。その後、工部省から広島県に移管のうえ、砂鉄を原料とする鉄鋼生産を行ってきた広島鉱山の再開発にからんで、フランスへ出張する。

農商務省に復帰後、明治二十三（一八九〇）年から鉱山監督業務に従事したが、日清戦争の賠償金による官営製鉄所の設置に関連して、製鉄所製鉄部長になっている。しかし製鉄所の操業不調の責任をとる形で明治三十五年に休職となった。

明治三十八年、農商務省技師に復帰、鉱山局鉱山課長となった際に、出縄維則と出会うわけである¹²⁾。

最初の滞在地フライベルク

ドイツ留学が決定した中川維則が、滞在地と決定したのは、小花冬吉が学んだ鉱山専門学校の所在地フライベルクであった。そうして中川維則が帰国して、明治専門学校に赴任するとき、場所を秋田市に選んだ官立の秋田鉱山専門学校（現・秋田大学鉱山学部）が開校するのだが、その初代校長となるのが、小花冬吉という事実にも、注意をむける必要があるだろう。

第二次世界大戦後、東ドイツ（ドイツ民主共和国）に属し、カールマルクスシュタット（現・ケムニッツ）県内に位置したフライベルクは、人口五万程度の地方都市である。エルツ山脈東部北麓にあって、中世以来、地下資源の埋蔵で知られてきた。一一七〇年に銀鉱山の発見が、集落形成を促した¹³⁾。中川維則の在学当時、学生数は¹⁴⁾四百人程度であったらしい。

カソリック教徒の住民によって維持されてきたフライベルクは、三十年戦争当時、一六四二〜三年にわたり、神聖ローマ帝国に対抗したスウェーデン軍の猛攻にさらされたが、市民と鉱山従業者による英雄的な奮闘によって、市街は破壊をまぬがれた。中川維則の滞在当时は、とどころに城壁を残す環状の遊歩道が存在した。この内部が旧市街に相当し、鉱山専門学校は旧市街西部に位置する事実が、市街地図によって読みとれる¹⁵⁾。

中川維則がフライベルクに滞在して鉱山専門学校に学んだ期間は、明治四十一（一九〇八）年三月から翌年八月上旬までであったと思われる。滞在中の消息は、父親の善太郎あてに発送した絵はがき通信を介してある程度明らかになる。またフライベルクでの下宿にあてて、留学生仲間が送った絵はがき通信によってもうかがいうる部分がかかり存在する。

絵はがき通信を介して明らかになるフライベルクでの下宿は¹⁶⁾二か所で、Pufferstr. 2a¹⁾と Schutzstr. 4²⁾であった。前者への着信は、一九〇八年四月二日から同年十二月二十七日までの消印をもつ絵はがきであり、後者には一九〇八年十月二十八日から翌年七月十一日までの消印で到着している。二か月ほど日付が重複しているのは、引越後に旧住所へ到着したものが、転送された結果と思われる。フライベルクの一九〇四年当時の人口は約三万¹⁷⁾、異色の日本人留学生ゆえ、郵便局が動静を把握していたのだと解される。Herrn. Nakagawa (aus Japan) Freiberg i. Sa. だけで着信した絵はがきも残っている。

渡欧経路を探る

中川維則がドイツ留学に出発した月日、乗船名は残念ながら判らない。寄港地から発信した絵はがきは、ホンコン（一月二六日）、シンガポール（二月二日）、コロンボ（二月九日）からの三通が残っている。いずれもごく一般的な寄港地ゆえ、乗船の所属会社を割り出す手がかりにはなり得ない。しかし、コロンボと到着地を記す絵はがきの画面は、マレー半島西岸のペナンで入手したものを使用のうえ、上陸の際に日本人経営の旅館にたちよつたら、おいらん（からゆきさん）ばかりなので、『西洋 Hotel』に至りて午食を喫しと書くのが、ひとつの手がかりを与えてくれる¹⁶⁾。

この絵はがきには、三月二日付でホンコン・ビクトリア局の消印がついている。コロンボで投函しホンコン中継を意味するのは、積載の郵便船がホンコン止りのゆえであろうか。このほか、未使用でポートサイド、マルセイユが画面となる絵はがきが、中川維則の遺品からみつかるが、この二港は東アジアヨーロッパ航路の定期船が数多くたちよる地点だから、船会社の割りだしには役立たない。

中川維則が鉱山監督官の身分で渡欧したためか、マルセイユ到着に際して日本領事館からフランス人職員が埠頭へ出迎えにでていた由である。ところが、中川維則を「発見」できずに帰館し、イタリア人は下船したが日本人はいなかったと報告したという。そうしたところへ、その「イタリア人」が中川維則を名乗ってあらわれたので、事の意外に関係者がびつくりしたとのエピソードが、親族間で語り伝えられている。

ドイツ滞在中の中川維則の肖像写真は、確かに日本人離れた顔付とみてとれる。この事実と、下船者に日本人がいなかったという事実を重ね合わせれば、乗船は日本郵船の所属ではなく、イギリスの船会社 P & O (Peninsular & Oriental Steam Navigation Co.) の所属ではな

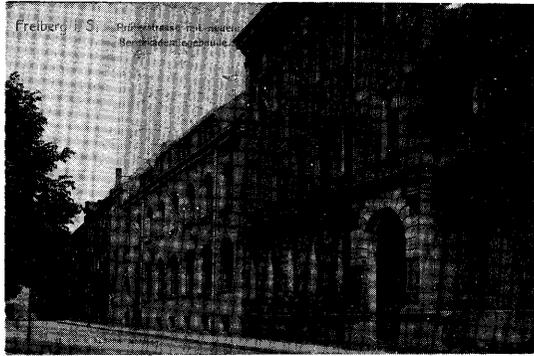
からうかと思わせる。

マルセイユ上陸後は、鉄道利用でパリにでた後、ケルンを経てベルリンに到着した筈のだが、直接的な手がかりはみあたらない。ベルリンには、明治四十一（一九〇八）年二月二十七日に着いたと報じる絵はがき通信が残っている。

居心地がよかったフライベルク

フライベルクの鉱山専門学校で中川維則が学生生活を始めたのは、三月末か四月はじめからと思われる。フライベルクの下宿にあてた留学生仲間からの絵はがき通信は、四月九日付消印が最初である。また父親あての絵はがき通信で最初の日付は、五月十七日付消印であった。

この当時、ドイツ国内各地の鉱山専門学校には、多くの国から留学生が来ていた様に思われる。翌年七月二十一日からホフマン Hofmann 教授引率で行った十日余りの修学旅行での寄せ書きには、イギリス人ベルギー人、ロシア人、アメリカ人の署名が入っている。こうした国際的なふんい気も加ってか、フライベルクでの学生生活は、仲々快適であったらしい。五月七日付消印でベルリンから小池佐太郎（明治三十八年七月 探鉱及冶金学科卒業）が送った通信には、「当地に来てフライベルヒの良いところがわかり申候。学校の学生間の交情などとても御地の如きものなし。居心地はフライベルヒが確かに良い」と記されていた。そのうえ中川維則は、若い女性からピアノを習っていたらしく、「ピアノは御上達なされしや、フロイラインは別嬪ですか」¹⁷⁾。ピアノの御稽古はどうです¹⁸⁾ など、やっつき気味の通信を受けとった事実を確認できる。



第1図 フライベルク鉱山専門学校
Pruferstrasse に位置していた



第2図 フライベルクの目抜き通り
Roter Weg



第3図 中川維則像
カルルスバードにて写す



第4図 巡検中のフライベルク鉱山専門学校学生たち
後列中央右よりで帽子を斜にかぶる
人物が中川維則

けれども、鉱山専門学校の当事者にとっては、日本人留学生は厄介な存在であつたらしい。ベルリンに滞在中、親しく交際していたと思われる寺野寛二(三十五年七月 応用化学科卒業)は、ベルリンからゲームスタットかアーヘンのどちらかへ行って研修したいとは思っているが、決定しかねる理由を「何となれば学校が我々外国人に大なる便宜を与えざる事は何所も皆同一」と通信している。寺野の場合には、専門とのかかわりから工場見学も希望していたが、「小生の方面にては工場は全然見られぬ事と思つて居る……蓋し皆民業で鉱業と異なり、秘密を有すればなり」との判断を下していた¹⁹。

この様に学校側が外国人、とりわけ日本人を厄介者扱いにした理由の中には、日本人留学生が正規の教育課程にもとづく学生ではなく、研究生、聴講生としての在学であり、なにかと手数がかかる存在であつたためかと思われる。そのうえ、日本人留学生は入れかわりたちかわり、鉱山専門学校にあらわれる存在であつた。

中川維則がフライベルクに着いて約半年たつた十月三日には、後藤正治(三十六年七月 採鉱及冶金学科卒業)が、ベルリンから到着して留学生生活を始めている。また到着した日付は不明であるが、杉本五十鈴(三十四年七月 採鉱及冶金学科卒業)も加つた。そのうえ明治四十二年正月ころ、さらに一名が加つて、日本人留学生は四人になつた旨を、絵はがき通信で中川維則は述べている。

鉱山・炭鉱を数多く訪ねる

フライベルクの鉱山専門学校在学中、中川維則はたびたび鉱山の实地見学に出むき、ときには坑内にも入っている。絵はがき通信に現

れる最初の旅行は、教授引率によるザクセン丘陵 *Sachsisches Bergland* の地質見学であつた。ライプチヒに一泊する二日間の小旅行であつたらしい。第一日目の中食をワルドハイム *Waldheim* という谷間の小都市でとつたと報じている。『ベデカ旅行案内』北ドイツ篇(一九〇四年)によると、ワルドハイムは人口一万六百人、小都市だが大きな刑務所があるとの意外な記述が見出される。

次は個人旅行で、動機は六月七日から十日間、フィングステン祭と称する休暇が続くのを利用したものであつた。フライベルクの位置がオーストリア・ハンガリー帝国のボヘミア地方(現チェコスロバキア)に近いのを利用して、外国旅行を計画したのである。

この時にだした絵はがき通信は一通だけで足どりは良くは判らない。六月十日にフライベルクを出発し、ドレスデンで列車を乗り換え、ドイツとオーストリアハンガリーの国境を構成するエルツ山脈 *Erzgebirge* を越えて、テプリッツ *Teplitz* におもむいている。ここで一泊するのだが、この行程のうち、国境直前のアルテンベルク *Altenberg* までは、六月一日に採鉱学担当のトレプトウ教授引率の錫鉱山見学旅行でむいていた事実が、鉱山長、教授と三十人ほどの学生が会した記念写真によつて明らかになる。次の日は午前中を炭鉱の見学にあて、午後は高度八三五メートルに達する円錐状火山のドンネルスベルク *Donnersberg* に登っている。山頂に高層気象観測所が設置されていた事実が、絵はがきの画面から読みとれる。第二日目の宿泊地はどこにとり、以後どの様に行動したかは判らない。

ボヘミアから帰つて再び一月ほど学業に従うが、夏休みに入ったため、七月三十日頃にフライベルクを出発し、八月末ころまで連続する旅を行った。このおりの絵はがき通信は、僅か二通が残るだけで、足どりはほとんど判らない。絵はがきの画面には、モリツブルグ *Moritz-*

burg 動物園がある。モリツブルグはドレスデンの北郊十キロほどに位置し、ザクセン王国の離宮となっている一五四二年建立の城館が建つと『ベデカ旅行案内』北ドイツ篇（一九〇四年）には記される。

この旅は、シレジア地方見学が主目的と記しているが、八月十八日にプレスラウ Breslau にたち寄ったのが判っている。プレスラウは第二次世界大戦後はポーランドに帰属し、プロツワフ Wroclaw と改名しているが、シレジア地方の中心都市であった。八月十日にシレジア地方の見学を終え、八月十一日にはオーストリアハンガリーのブダペストに着いている。次はウィーンに向い、八月二十日すぎにフライベルクにもどる予定と、ブダペスト発の絵はがき通信は記しており、ウィーンを画面にする絵はがきも残っているほか、チロル地方の大判写真帳も遺品中にみいだされる。

社交やスポーツにも眼をむける

フライベルクに滞在中、中川維則はときおりドレスデン Dresden に足をむけている。フライベルクがドレスデンの南西約三十キロに位置すること、ドレスデンがザクセン王国の首都であり、ここにも日本人が滞在し、交友がさかんだったのが理由だろう²⁰。その一例として、明治四十一年（一九〇八）年十一月三日に天長節奉祝の会合が計画された事実を指摘しよう。

会場予定のホテル・シュタット・ゴータ Hotel Stadt Gotha は、ドレスデン旧市街に位置する一級ホテルのひとつで、レストランとしても一流との案内が『ベデカ旅行案内』北ドイツ篇に示されている。当日はフロックコート着用との指示があるし、会費が十五マルク位との

予告にも驚かされる。ホテル・シュタット・ゴータの室料は二丁四マルクでペンション（二泊二食）が七マルク半以上と記されているからである。

この会合に、中川維則は出席しなかった。理由はベルリン駐在の日本大使から天長節奉祝の会合への招待状が送られてきたので、それへの出席を優先したからである。天長節奉祝の賀状は、アーヘン Aggelen 滞在の杉本五十鈴からも届いている。アーヘンには一八六〇年代に創立の高等工業学校 Technische Hochschule があり、七百人ほどの学生が在籍しており、鉱山学科は電気工学科と並んで、一八九七年の設立であった。

アーヘンは、ドイツとベルギーの国境に接する工業都市で、当時はせいの、鉄鋼、機械工業が盛んと記されている。歴史的には、フランス、ドイツの双方が争奪をくり返しており、フランス式の地名である Aix-la-Chapelle の方が、一般的であつたらしい。中川維則は、フライベルクの次にはアーヘンで研修と考えていた様で、翌年三月に発送の絵はがき通信には、その準備としてフランス語の勉強を始めるつもりと記していた。これはフライベルクでの研修が七月で終了となり、次の研修地を探す必要があつたためと思われる。けれども、アーヘンでの研修は実現しなかった。

フライベルクの冬には、さして困難を感じず「氷すべり」に興じかなり上達と報じている。スケートの練習に一生懸命であつた様子がかがえて、ほほえましい、まだ二十代の青年、そして未婚の生活をエンジョイしていた様に思われる。研修は、治金を対象に行っていた。

春を迎え鉱山見学を再開

春の訪れが感じられる様になった三月二十日から、中川維則は鉱山の見学旅行を再開した。まずベルリン付近を十日間ほど歩き、次はオーストリアのハンガリー方面を予定したが、なぜか実行したのは、ハルツ山地の鉱業地視察であった。

四月十五日にライプチヒを出発し、ハレ Halle に着き、ここで鉱山監督署に向いて、炭鉱、鉱山見学の打合せを行った。ハレには十九日まで滞在し、二十日にマンズフェルト Mansfeld で銅山の坑内を見学し、翌日は精錬場の見学を行っている²⁾。

四月二十五日には、ハルツ山地北東部の鉱業都市ゴスラー Goslar に着き、翌日は鉱業地視察の予定と絵はがき通信は報じ、さらにベルリンにおもむき、鉱山学校を訪問する予定であった。

鉱山見学の記録としては、六月四日にスタスフルト Sassenfurt の岩塩鉱を訪れ、深度千四百三十尺(約四百八十メートル)の竖坑に降りたとの絵はがき通信も残っている。スタスフルトは、エルベ川にのぞむ商工業都市マグデブルグ Magdeburg の南約四十キロに位置し、ライベルクからはケムニッツ、ライプチヒ経由で出向いたと思われる。地図で調べると、途中いく度かの乗り換えが必要な筈で、日帰り旅行はできなかつたろう。六月七日にライベルクから発送したこの絵はがき通信では、気温上昇がはなはだしく、摂氏二十六度に達して内地の八月を思わせると報じている。

六月二十日、帝国大学工科探鉱及冶金学科の同級生で親友の日置雅章が、高壮吉(三十年七月 探鉱及冶金学科卒業)と同道でベルリンから到着した。アンハルター駅 Anhalter Bhf. 十二時十五分発で六時十八分ライベルク着との便りが送られていた。『ベデカ旅行案内』北ドイツ篇(一九〇四年)では、ベルリン―ドレスデン間は急行

列車で三時間、普通列車で四時間半と記されるから、ドレスデンでの列車接続があまり良くなかつたのだらう。

高壮吉については、鉱山専門学校のガリ先生についてシュタイヤーマルク方面への見学旅行にゆきたいので、都合を聞いてくれる様にとの問い合せが六月二十三日付消印の絵はがき通信で届いていた。シュタイヤーマルク Steiermark は、現在ではオーストリア南東部とユーゴスラビア北西部にまたがり山地の卓越する地域で、鉄鉱の産出で知られていた。

修学旅行でハルツ山地を見学

中川維則のライベルク滞在は、明治四十二(一九〇九)年七月二十二日で終了した。そうしてこの日は、冶金学が専門のホフマン教授引率による修学旅行の第一日でもあった。多国籍の学生十二人、うち二人が日本人で、中川維則と杉本五十鈴が参加している²⁾。

最初の目的地は、プロッケン山 1143m に代表されるハルツ Harz 山地に位置するクラウスタール Clausthal であった。クラウスタールは、ハルツ山地北西部に位置し、ライプチヒからハレを経てゴスラー Goslar (所要約五時間)に達し、ハノーバーへと通じる亜幹線を利用のうえ、ゴスラーから行きどまりのローカル線に乗り換えて約一時間半の鉱業都市であった。

クラウスタール付近の鉱山群は、ドイツ国内で最も重要な存在で、鉱山専門学校も開設されていた。カイザー・ウイルヘルム二世鉱山の坑道は、九百五十メートルの深さに達した由である。

一九〇〇年の鉱産は、金二百九ポンド、銀七万七千五百五十三ポンド、

鉛九千二十九トン、銅二百トンに達したが、部外者の見学は許可されないといふ『ベデカ旅行案内』北ドイツ篇(一九〇四年)には記されていない。とはいえ、紹介状持参ならば見学は可能だったらしく、この年の二月にフライベルクを訪ね、クラウスタールに向った長谷川恭平、梶浦謙次郎の二名は、それぞれ古河(足尾)、住友(別子)の社員であったが、見学の目的を達していた。そのおり体験したハルツ山地の寒気は、非常なものだったと記されている。

第二番目の見学地はマールスベルグ Marsberg で、七月二十四日午前中を鉱山の見学にあて、午後はエッセンに向け出発と、絵はがき通信には記される。マールスベルクは、ライン川畔のケルンからカッセル Kassel に到る亜幹線上に位置する小都市で、ロータル Rotar 高原の北東部にあって、市街は上町、下町に分れていた。見学の対象になったのは下町で、大規模な銅精錬工場が立地した。付近には製鉄所も存在する由である。マールスベルクには、施設の整った精神病院もあるのだが、これは見学の対象外だったろう²³⁾。

エッセンには、採鉱及冶金学科で同級の永積純次郎が滞在していた。ルール工業地帯に位置する鉄鋼業の中心地ゆえ、永積工学士は、製鉄製鋼にかかわる技術の研修に従っていた筈である。

工業地域やダムも見学

修学旅行第四・五日はストールベルク Stolberg に滞在した。絵はがき通信には、『付近亜鉛製錬場見物』と記している。ストールベルクはアーヘンの東約十キロに位置し、人口約一万五千と記録されるが、付近では石炭のほか、亜鉛、鉛、銀を産出し、ドイツ有数の工業地域

が形成されていた。工業化の基礎は、十六世紀にフランス人新教徒たち(ユグノー)による黄銅加工業に端を発する由である。産業革命の進行に伴い、ピン、針、鏡、ガラスなどの生産が活発に行われる様になった²⁴⁾。

ストールベルク滞在中の絵はがき通信は、アーヘンの高等工業学校を画面に収め、『本年十月より就学すべき鉱山学校の写真なり』とのコメントを付していた。またドイツ領ではあるけれども、オランダ、ベルギーの国境に近く、列車で十分ほど走れば、どちらの国にも入りうる非常に珍しい土地との解説を行っている。

ストールベルクの見学を終えると、次はケルン Köln にでて、ここで二泊する予定と書き、アーヘンからケルンに直行する列車があるけれども、一行は道を脇にとつて、マース Mass 川支流のルル Rur 川上流にダムを築造して設けられたアイフェル Eifel 湖を見学のうえ、カール Gill に出て、ここでは鉛製錬場にたちよっている。

見学したダムは、ウルフタールダムとよばれ、堤高五八メートル、四千五百万立方メートルを貯水し、湖水面積二百十六ヘクタールに達していた。当時の日本には、大規模なダムは存在しなかった。一行はこの人工湖を汽船で渡り、山越えしてカールに着いている。この日は雨天で山越えは雨中行軍三里で相当な強行と、絵はがき通信が報じるほどであった。『ベデカ旅行案内』ライン篇(一九〇六年)によると、このダムの貯水を利用した電力が、アーヘン地区の工業化に資する由である。

カールは製錬場の存在だけがめだつ村落で、アイフェル高原を貫いてケルンからザール地方北端のトリエル Trier に達する支線の小駅がおかれ、ケルンから約六十キロのへだたりとなっている。

ケルンに足かけ三日滞在し、鉱山用諸機械の製造所の見学を行った。

ホフマン教授の指導は、冶金の分野にとどまらず、広い見地になつてドイツの鉱工業の特色を具体的に把握させようとするものであつた様に思われる。

国際飛行船博覧会見学で解散

修学旅行が、最終地点をフランクフルト Frankfurt am Main と決めていたのは、この地を会場にして、「空中飛行機博覧会」が開かれるのを見学するためであつたという。未使用の絵はがきにつけられた見出しが Internationale Luftschiffahrt Ausstellung Frankfurt a. M. 1909 とあるから、正しくは「フランクフルト国際飛行船博覧会」であつた。主役は、ツエッペエリン硬式飛行船とみてとれる。

ケルンからフランクフルトへの道筋は、ライン渓谷沿いにとられていた。外国人学生が一行中で七人もいることゆえ、ドイツ有数の景勝地を充分に見学させようとの計画であつたろう。

旅行第九日は、ライン川にモーゼル川が合流し、ライン渓谷の要地に位置づくコブレンツ Coblenz に到着した。宿泊はコブレンツの少し上流でライン川に合流するラーン Lahn 川を合流点から十五キロほどさかのぼつた右岸の温泉場エムス Bad Ems であつた。歴史的には、晋仏戦争開始のきっかけになつたといわれる「電報事件」ゆかりの地であるが、ホフマン教授の思惑は、付近に存在する鉛製錬場の見学に合せての手だてであつた様にてとれる。

コブレンツからライン川を上流に十キロほどさかのぼると、右岸にブラウバッハ Braubach の集落がある。ここにたちよつての恐らく中食のおり、修学旅行に参加の十三人が、それぞれ絵はがきに記念の署

名を行つた。それに中川維則が学生の国籍を追記したので、この旅行団が国際色に富む存在と判るわけである。

修学旅行は、八月五日にフランクフルトで解散になるけれど、八月三日にはライン渓谷への入口部分を構成し、左岸にピンゲン Bingen をのぞみリューデスハイム Rudesheim の市街を眼下に見下すニードーワルト Nidderwald の丘に建つドイツ統一記念碑 National Denkmal を見学している。晋仏戦争の勝利によつて成立したドイツ帝国の記念として、一八八三年に建てられたものである²⁵。

フランクフルトで解散後、ライン川がライン川に合流するすぐ下流に位置し、対岸にマインツの市街をのぞむウイスバーデン Wiesbaden の温泉場にもむき、七月末から滞在中の日置雅章と落ち合った。

日置雅章はフライベルクからフランクフルトに来て、国際飛行船博覧会を見学したおり、場内に設けられていた日本の茶屋にたちよつたところ、日本人観客たちに出会っている。

鉄道ストライキが出鼻をくじく

修学旅行を終えた中川維則が日置雅章と落ち合ったのは、メンパーに高壮吉と小池佐太郎を加えてスウェーデンからノルウェーへと周遊し、ラップランドの鉄鉱石採掘とその輸送状況を見学する旅にでる予定をたてていたからである。

中川、日置の両名は、八月七日にベルリンにむき、ここで高と小池が合流、スウェーデンとノルウェーの公使館でビザをとり、旅を始める予定であつた。ところがスウェーデン公使館から、スウェーデンでは現在、鉄道従業員がストライキを行つて解決の見通しがたない

から、出発を延期する様にとの勧告を受けてしまった。

そのため予定を変更してベルリンに一週間ほど滞在し、様子を見ることになった。しかしその後も事態は好転せず、北ヨーロッパへの旅行は八月二十九日の出発と大巾の変更を余儀なくされている。

北ヨーロッパ旅行に出発するまで、中川維則は日本人留学生とは別れて、ただ一人でベルリン西郊に位置するグリネワルド Grinewald のペンションで、いわゆる外人と共同生活をするようになった。『同宿の御客一同約十四、五名と食卓を共にしたし雑談にも散歩にも皆一緒』の生活と、絵はがき通信は報じている。

現在では西ベルリンの市街地に取りこまれてしまったが、当時のグリネワルドは、ベルリン市街南西端に位置し、西よりには広い森林が開けていたのである。

ところで、北ヨーロッパ旅行を計画した四人の探鉱及冶金学科卒業生は、キルナ、エリバレの鉄鉱山見学と組み合わせて、極北の地とのかいの遊牧に従事するラップ人の地―ラップランドの見学を策していたのだが、同じ時期にしかもベルリンに滞在し、ベルリン大学で物理学の研修に励むかたわら、夏休みの旅行地として、ラップランド探索を計画した日本人のいたことが判っている。

東京帝国大学理科大学助教授として、ベルリン大学で研修中の寺田寅彦（一八七五―一九三五）がその人で、行動の記録は、『寺田寅彦全集』第十三巻（日記一）、同第十五巻（書簡一）に収められる。寺田寅彦が、北ヨーロッパの旅へとベルリンを出発したのは、明治四十二（一九〇九）年八月十八日であったが、ドイツからスウェーデンに直接には入らず、まずダンチッヒ Danzig 現ポーランド領グダニスク）に向っている。ついでペテルブルク（現・レーニングラード）におもむき、ストックホルムに着いたのは、八月末であった。ペテルブルク、

ストックホルムではともに気象台を見学しているが、ペテルブルクゆきが当初からの予定なのか、ストライキ回避策であったのかは判らな

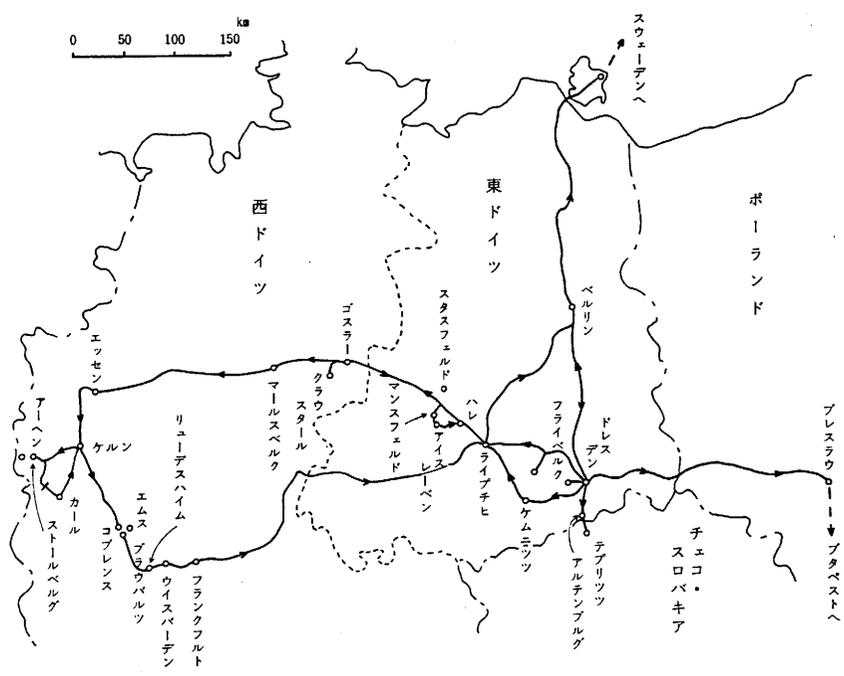
鉄鉱山見学でラップランドに行く

四人の工学士が、北ヨーロッパ旅行に出発したのは、八月二十九日であった。ベルリンから北に向い、バルト（東）海沿岸のザスニッツ Sassiniz で鉄道連絡船に乗り、スウェーデン最南端のトレルエボルグ Trelleborg に着いている。ザスニッツとトレルエボルグを航路でつなぎ、ベルリンとストックホルムを結ぶコースは最短経路で、所要二四時間と『ベデカ旅行案内』ノルウェー・スウェーデン篇（一九〇九年）には記される。

ストックホルムに立ち寄ったことは、日本公使館気付で中川維則に宛てた絵はがき通信が残るために、間接的だが証明できる。ストックホルムからバルト海に沿って北に向い、ポーデン Bodén を経て、エリバレに九月五日に着いている。この当時、ストックホルムからポーデンを経てエリバレ Gellivare、さらにスカンジナビア山脈を越えてナルビク Narvik に達する「ラップランド Lapland 急行」が、週三回、六月半ばから八月まで走っていたが、四人の工学士は利用できなかったと思われる。ルレオーボーデン―エリバレ間の旅客列車は、一日二往復であった²⁶。

北極圏（北緯六十六度三十分）以北に位置するエリバレでは、六月五日から七月十一日まで²⁷、太陽が地平線下に沈まない。九月始めでも、まだ夜はかなり短かったろう。

明治専門学校派遣滞独留学生 中川維則 中川・中川



第5図 フライベルク滞在中の巡検コース



第6図 スカンジナビア巡検コース
明治42(1909)年8~9月

エリバレは、キルナと並んで良質の磁鉄鉱を産するヨーロッパ有数の大鉱山といわれるが、正確に記述すれば鉱山の所在地は、エリバレから六キロほど離れたマルムベルグで、そこには、公共施設一式を備えた鉱山集落が開けていた。鉱山の開設は、一八六九年であった。

絵はがき通信は、9月8日付でキルナ Kiruna から発送されている。エリバレーキルナ間の旅客列車は一日一往復あるだけで、ナルビクが始発終着だが、『stopping for the night at Kiruna と『ペデカ旅行案内』ノルウェー・スウェーデン篇は記すから、旅客も一泊が必要であった。このほか多数設定されている貨物列車には、三等車が併結されていた由である²³⁾。

エリバレの鉄鉱石は、当初バルト海岸のルレオに輸送されて船積されたが、冬期結氷による輸送杜絶をさけるために、一九〇三年以降はスカンジナビア山脈を越えてナルビクに達するルートが開かれている。

鉄鉱石積出港ナルビクを見学

北緯六十八度の緯線に近いキルナは、鉄鉱石採掘を目的に開かれた集落であった。産出量、鉱石の品位はエリバレ産をうわまわり、最高七十パーセントに達すると記される。市街から鉱山に達するには、専用の電気鉄道、さらに鋼索鉄道を乗り継ぐ必要があり、見学者の利用も許されていた。

キルナ鉱山の見学では、いろいろな感じるところが多かつたらしい。絵はがき通信は、『瑞の山どっしりとして深然たるところ如何にも奥床し日本の山の剣気を帯ぶるに似ず』と記して氷河の侵蝕を受けた山容を紹介してから、『人情質朴真に大古の民に似たり然も中々能く氣

の付く処馬鹿にあらざるかな』と評している。加えて「秋寂し一行四人北緯七十度」「キルナワラ母国を想ふ北斗星」「夜寒し父母に文書くラブランド」の句を残している。

ところで工学士四人のキルナ鉱山（キルナワラ）見学の五日前、ストックホルムで気象台見学を終えた寺田寅彦も、この地を訪ねていた。『寺田寅彦全集』第十五巻（書簡一）には、九月三日付でナルビクから夏目漱石あてに送った絵はがき通信が収められるが、『昨日ラブランドの鉱山でトナカイの肉を鯉節のように干し固めたのと、同じ動物の乳で作ったチーズを食いました』との報告がみいだされる。

九月八日朝、キルナを出発し、分水嶺を越えてノルウェーに入り、鉱石積出港ナルビクに到着した。国境の駅リクスグラセン Riksgräsen では絵はがきを買い、八時三十七分と到着時刻を書き入れた後、記念の署名を行っている。九月はじめでも積雪をみた由である。

リクスグラセンの高度は一七〇六フィート（約五百七十メートル）だが、ルレオーナルビク間での最高点は、エリバレーキルナ間に存在し、一八二八フィート（約六百十メートル）に達していた。国境の駅ではあるけれど、ノルウェーへの入国検査はナルビクで行い、リクスグラセンはスウェーデンへの入国者のみを扱う手筈であった²⁴⁾。

リクスグラセンからナルビクまで、列車は多くのトンネルをぬけ、最急一三パーミルの勾配を下ってゆく。ナルビクでは、鉄鉱石積出施設を見学した。『規模大見学の価値有したり』と、絵はがき通信は書いている。

九月九日付消印でナルビク投函の絵はがき通信の画面は、ラップ人の風俗が題材である。ラップ人の生活について、寺田寅彦は、『ラップの土人の娘は美しい。ちびけた樺の木と苔の厚くむした岩塊ばかりの曠野をトナカイの群が駆っていきました』と漱石宛の通信に記して

いた。寅彦のナルビク着は九月三日であつたらしい。

極北の銅鉱山にもたちよる

オホーテンフィヨルド Ofoten Fjord の奥に位置するナルビクは、北大西洋海流の影響により、不凍港として機能し、それゆえにスウェーデン産鉱石を、イギリス、ドイツなどへ積みだす拠点として利用されてきた。市街は鉄道、港湾の完成した一九〇二年の創設であつた。

ナルビクには郵便船が寄港し、旅客も利用できるが、就航目的上、沿岸へこまめに立ち寄るので、スピーディな交通機関とはいいがたい。四人の工学士のうち、中川維則はボーデ Bodo で下船した。他の三人は船旅を続け、トロンヘイムかベルゲンから列車でクリスチヤニア（現・オスロ）に出てベルリンに向つたと思われるが詳細は判らない。

ボーデは、北緯六十七度十七分に位置し、ノルウェー北部 Nordland の行政中心として機能していたが、中川維則の目的はここから六十キロほど奥地に入り、スウェーデンとの国境に近い氷河湖のほとりに存在したスリテルマ銅鉱山を見学することであつたらしい。

スリテルマ Sulitelma へは、ボーデから小蒸気船、軽便鉄道、さらに小蒸気船と乗り継いで到達するフルルンド Furulund が、もよりの集落であつた。『ベデカ旅行案内』ノルウェー・スウェーデン篇（一九〇九年）によると、銅鉱山はスウェーデンの会社によつて稼行され年間二万トンの鉱石を産出した由である。年間一五〇〇―二〇〇〇人が働き、見学者は事前に申し込めば、宿泊も可能と記される。

この様な僻地の銅鉱山をよく訪ねたと感心させられるが、既訪の日本人（工学士）がいたのには驚かされる。『學士會月報』に連載され

た「諾々集」の作者中村飄々庵がその人である³⁹。

秋の季節にラップランドを巡回した記録の中に、夜寒し父母に文書く「ラップランド」と、全く同じ句を吟じたのも驚きだが、「スリテルマ」銅山にてと題したうえで、人の慾氷河の底に銅あさる 割れば氷る 滲筋狭き川港 淨瑠璃の一節うなる夜寒哉 電報に火炊かせ置きて雪の宿 の四句が収められていた。

スリテルマ見学以後の中川維則の足どりは、九月二十日にクリスチヤニア Christiania でビクトリア・ホテルに泊まり、二十五日まで滞在したらしいこと以外は判らない。十月以降、帰国まではベルリンで生活し、見学旅行は試みなかつた様に思われる。

注

- (1) 寺田晃編『九州工業大学七十五年史』（一九八四年 明専念）四四ページ。
- (2) 文部省保管の中川維則の履歴書による。
- (3) 唐澤富太郎編『図説教育人物事典』中巻（一九八四年 ぎょうせい）二六〇ページ。
- (4) 『コンサイス人名辞典』日本篇（一九七六年）一一四〇ページ。
- (5) 寺田晃編『九州工業大学七十五年史』四五ページ。
- (6) 劉寒吉『松本健次郎伝』（一九六八年 松本健次郎伝刊行会）二〇五―二一四ページ。
- (7) 唐澤富太郎編『図説教育人物事典』下巻（一九八四年 ぎょうせい）四八五―四八六ページ。
- (8) 寺田晃編『九州工業大学七十五年史』四四―四五ページ。
- (9) 注（8）に同じ。
- (10) 唐澤富太郎編『図説教育人物事典』中巻 二六〇―二六一ページ。

- (11) 三好信浩『明治のエンジニア教育―日本とイギリスのちがひ』（一九八三年 中公新書）二十六ページ。
大河原三郎『近代鉱業と先覚』（一九五七年 鉱業史料研究会）五十三ページ。
- (12) 大河原三郎『近代鉱業と先覚』五九―六十ページ。
- (13) Karl Baedeker: Northern Germany, 14th ed. 1904, pp. 261-262.
- (14) 渡辺光ほか編『世界地名大事典』3 ヨーロッパ・ソ連Ⅲ（一九七三年 朝倉書店）一〇九二ページ。
- (15) Prufersr. に面して新校舎が建っていた。
- (16) 自らの意志で下宿を変えたのではなく、家主の引越に伴って移転を要請された結果である。『寓居住人の荷物が多い爲二日がかりの引越し、小生も少々手伝えねばならぬ訳で妻君は僕の好意を大に謝して居る』と絵はがき通信に書いている。引越しは十月一日に始った。
- (17) 注(13)に同じ。
- (18) ベナンに寄港するのは、イギリス系の船が主であり、フランス郵船や北ドイツロイド汽船は、シンガポールからコロソボへ直航した。
- (19) 明治四十二年十二月五日付でアーヘン滞在の留學生（多分、後藤正治）からの通信は、『学校にて一部（実は大部分なるべきも）は独乙の学問を盗みに来たと言葉にだして言ふ事あり』、『市中にてはキネーゼ、ヤバネーゼをアピセカケラレル事はしばしばで小供はもち論、小学中学の生徒には、パン、リングの喰いかけなどを投げるもあり』と報じ、日本人が招かれざる客の状況におかれていた事情を、具体的に述べている。
- (20) 十一月一日現在で、齋藤少佐、小野大尉の二人の軍人と遠藤、参木、中沢、山崎の四名が滞在していた。少し前までは潤田と名乗る人物も滞在していた。
- (21) 絵はがきの文面には、アイスレーベン *Eisberg* に立寄ったとの言及はないが、切手の消印にはアイスレーベン郵便局の取り扱いが明示されている。アイスレーベンはマンسفエルトの南東約五キロに位置し、プロテスタント発祥の地に相当する。マルチン・ルターはこの地に生まれ、そして没した。
- (22) ホフマン教授は、クラウスタールの鉱山専門学校に所属していた。学生たちの所属は判らない。
- (23) Karl Baedeker: Northern Germany, 14th ed. 1904, p. 48.
- (24) Karl Baedeker: Rhine, 16th ed. 1906, p. 14.
- (25) 同右一三七・八ページ。
- (26) Karl Baedeker: Norway and Sweden, 9th ed. 1909, p. 300.
- (27) 注26に同じ。
- (28) 注26に同じ。
- (29) 同右三九三ページ。
- (30) 『諸々集』は、明治三十九（一九〇六）年六月号から断続的に『學士會月報』に連載された句集で、明治四十一年四月号（二四二号）で完結した。日本を出発し、アメリカ合衆国、メキシコを経てヨーロッパに渡り、南アメリカを経てオーストラリアまで足をのびして帰国する大旅行であった。作者は、『學士會月報』の会員動静らんの記事から、明治四十一年三月二十一日に帰国した住友別子鉱業所主任兼四坂島事務所副長の中村啓二郎（明治二十五年七月採鉱及冶金学科卒業）かと思われる。

付記

『會員氏名録』（學士會）の検索から、明治専門學校は、中川維則のほか、桑木或雄（くわき・あやお）、寺野寛二もドイツに留学させた事実が明らかになった。桑木は明治三十二年七月に理科大学物理学科卒業、寺野は明治三十五年七月に工科大学応用化学科卒業である。両名は後に九州帝国大学に転じている。中川維則は明治専門學校にとどまり、官立への移管を経て、昭和八（一九三三）年一月に明治専門學校校長となった。昭和十六年九月に退官した。

謝 辞

本稿を草するに当たっては、『學士會月報』『會員氏名録』の閲覧に關して、社団法人學士會事務局の勝又雅和氏から多大な便宜を供与されている。記して謝意を表させて頂こう。

(中川浩一 茨城大学教育学部社会科教育講座)

(中川 睦 株式会社トーモク)

(一九九〇年九月十四日受理)

明治専門学校派遣滞留学生 中川維則 中川・中川